

リモート講義での「対話と探究」を促進するための 事前学習教材

— 反転授業での使用を前提としたアート作品の解説動画制作のためのシナリオの公開 —

才士 真司 ・ 伊藤 駿

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》では、美術鑑賞の機会に、対話と探究を用い、アート作品の制作背景を社会課題の解決と関連づけて考察する手法を開発し、実践している。現在、COVID-19の感染拡大を防ぐことを目的としたリモートでの講義プログラムにおいても、この鑑賞手法を用いるため、「反転学習用動画教材」として、岡山県に關係する洋画家ふたりに關する動画を制作した。ここでは、制作のために執筆したシナリオを、反転学習用の動画制作のための作例として公開する。

Keywords : 反転学習, 動画教材, 国吉康雄, 清志初男, 対話探究型鑑賞法

1 はじめに

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》では、岡山県出身の画家、国吉康雄(1889-1953)作品を使用し、2013年より開催してきた展覧会の運営データを基に、「国吉型・対話探究型美術鑑賞モデル(以降、対話探究鑑賞モデル)」を開発し、その運用と検証を続けている。この手法は、アート作品の制作背景にある「社会課題」について、対話と探究を重ねることで、その認識を深くしようというものである。

また、現在のCOVID-19による感染拡大を防ぐため、本講座では「オンライン講義」の比率を増やしている。その際、ライブストリーミングエンジニアリングの実践を掲げ、受講生の視聴ストレスの軽減とプログラムへの集中、その継続のため、プレゼンテーションの刷新とマルチカメラ方式の採用による「視聴映像内空間」のバリエーション増やす工夫と、これを実現するため、映像と音声のマルチスイッチャーの導入を行った。加えて、通信量の軽減を重視した、複数のコミュニケーションアプリを組み合わせ実施している。本講座ではこれを、ライブストリーミングでの実践を行ってきたが、講義での

対話と探究の機会を充実させるため、「反転学習用の動画教材」も積極的に制作している。

これまで、オンラインでのツアー体験ができる映像教材として、戦後最悪の産業廃棄物不法投棄問題である「豊島事件」の現場で行われているガイドツアーと、ハンセン病患者の強制隔離問題を伝える長島愛生園歴史館で実施されるギャラリートัวร์の様子を動画収録し、字幕注や写真などの補足・参考資料を追加した動画コンテンツを制作してきた。

これに加え、岡山県立美術館と福武コレクションの協力を得て、国吉康雄作品の解説動画と、長島愛生園歴史館の協力で、国立療養所長島愛生園のアトリエで、独自の画業を展開した洋画家、清志初男に關する動画を制作した。ここで、そのシナリオを公開し、反転学習用のシナリオ作成の一例として公開する。(才士)

2 制作動画の概要

2.1 国吉型・対話探究美術鑑賞モデルについて

2.1.1 国吉型・対話探究美術鑑賞モデル開発の目的

対話探究鑑賞モデルは、明治期の岡山で生まれた渡米移民画家で、社会活動家である国吉康雄の作品

や研究資料を使用することで得られる学際的鑑賞体験を、効率的に鑑賞者に提供することを目的として開発された。

対話探求鑑賞モデルの開発は、2013年に香川県直島にあるベネッセハウスミュージアムで開催された『ベネッセアートサイト直島の原点-国吉康雄展』¹の企画開発チームに同展の演出・照明設計担当として参加していた才士真司（現・国吉康雄研究講座准教授）によって着手された。2015年に、『国吉康雄プロジェクト』の活動が、岡山大学に設置された本講座に引き継がれたことを契機に、筆者もその開発と実践に参加し、検証を重ねてきた。

2.2 国吉型・対話探究美術鑑賞モデルの要諦となる国吉康雄の人生と作品

対話探求鑑賞モデルについて考察する上で、その要諦である国吉康雄に関しては、[才士 2019]²に記載された内容を念頭に置くものとする。

国吉康雄は、岡山県岡山市北区出石町で生まれ、当時としては先進的であった岡山工業高校染織科で友禅の下絵などのデザインの指導を受けていたが、日露戦争が終わった翌年の1906年、徴兵登録年齢が迫っていたこともあり、父親の勧めで、労働移民として単身アメリカに渡ることになる。渡米後は、果樹園などで、過酷な季節労働に従事しながら、英語を学ぶために夜間高校に通った。国吉はそこで地図制作の授業で、そのデッサン力を教師に認められ、ロサンゼルス美術学校で、ヨーロッパの伝統的な絵画技術を学んだ後、画家になる決意をし、ニューヨークに移住。近代都市のモダニズム精神の恩恵を受け、その才能を伸ばし、ニューヨーク近代美術館への作品出品などのチャンスを得て、順調にそのキャリアを伸ばし、第26回ベネチアビエンナーレのアメリカ代表として選出されるなど、20世紀前半のアメリカを代表する画家として活躍した。しかし、アジア系労働移民である国吉に、アメリカ合衆国の市民権は、当時の移民法の規定により与えられることは生涯なかった。また、第二次世界大戦では、日米が開戦した後、敵性外国人として当局の監視下におかれた。このような来歴と経験を持つ国吉には、職業的にもマイノリティーである全米のアーティストの社会的権利を守る活動の先頭に立ち、アメリカ美術界を代表する社会活動家としての一面があった。その設立に国吉が大きな役割を果たしたアーティストの権利擁護団体『アーティスト・エクイティー・アソシエーション』では、初代会長を務めた。こうした近代社会制度と人種問題、戦時下において国吉が受けた偏見や差別は、作品表現にも現れている。

2.3 国吉型・対話探究美術鑑賞モデルとは

対話探求鑑賞モデルでは、国吉作品を主題に、鑑賞者と調整役のディスカッションを試みる。調整役は、鑑賞空間の運営と情報提供を行う。

鑑賞者はまず、調整役に促され、自由に作品の印象を発言する。このとき調整役は自由な意見が出やすい「場作り」を行う。このとき、意見を許容し、多様性を肯定することで鑑賞者と共に「寛容」という場のルールを観賞者が共有されるように配慮し、鑑賞者の直感的意見や、作品に対する「問い」の表明が、自然に行われるよう、促すことである。調整役は、観賞者の「気づき」や「問い」に、観賞者自身の経験や教養的要素の有無、混じり具合を測り、徐々に学際的な情報を鑑賞者に提供する。但し、作品制作に関わる直接的な情報の提供は、初期段階では行わない。時代背景についての考察を促し、議論を行うことで、観賞者の「探求心」を刺激する。この議論を踏まえて、鑑賞者自身の仮説が立て検証を行う「創造性」のフェーズに入り、仮説の提示を受け、当時の美術動向や、国吉自身や作品情報も提供し、議論を深め、観賞者からの新しい「問い」の提供を鑑賞空間で共有し、これを考察する。調整役と鑑賞者は、図のようにこれらの段階を繰り返すことで、思考体験を深めていく。(伊藤)

3 「反転学習用動画教材」の制作

筆者はCOVID-19による感染拡大を防ぐため、オンラインでの講義への切り替えを推進してきたが、受講生の学習体験の充実と、積極的な対話への参加を促すために導入したのが、「反転学習用動画教材」の制作である。

対話探究鑑賞モデルでは、まず作品を鑑賞し、「問い」を立てることを基本とする。このとき、観賞者自身の経験値や情報の有無によって反応は様々である。これを、国吉作品の制作背景などの情報を、調整役が学際的な情報を織り交ぜながら、段階に応じて提供し、鑑賞者同士の対話と、それぞれの探究行動を促すものである。これを繰り返すことで、図1のような、思考体験を深め、創造性と批評性、他社と対話し、課題に対するアプローチを深める力と取材力を獲得する。

この対話探究鑑賞モデルの、オンラインでの運用にあたって制作したのが、「反転学習用動画教材」としてのふたつの動画である。

ひとつは前述した国吉康雄作品《ミスターエース》に関するもので、もうひとつが、清志初男のライフワークであった《石仏》のシリーズの解説動画の制作である。

国吉型・対話探究鑑賞モデル

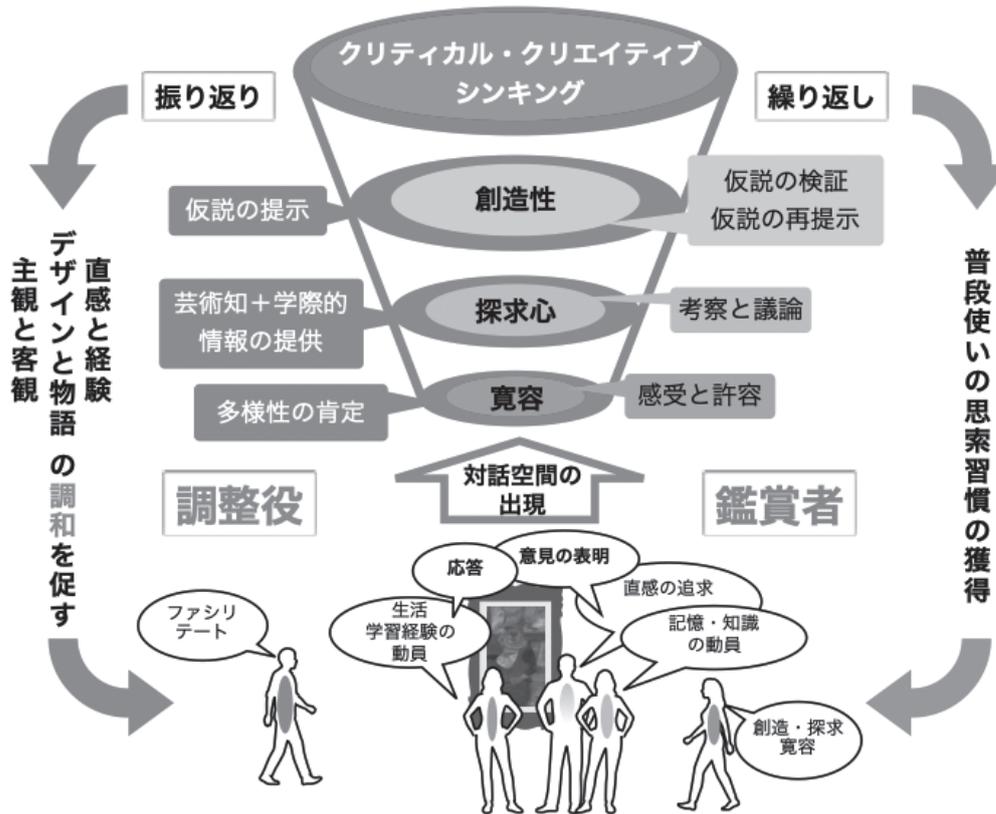


図1 国吉型・対話探究観賞方による効果図
作成：才士真司 2019

3.1 清志初男作品による動画開発の理由

前章で触れたように、国吉康雄作品による動画制作は、国吉作品の背景にある「アメリカ民主主義」を問う要素のためである。

清志初男作品では、清志初男作品の背景の、思想的背景に存在する社会課題を考察するための手段として動画を制作した。

鹿児島出身の清志初男は、本年8月11日に長島愛生園で逝去した。清志は太平洋戦争中、輸送船の船員として南方戦線に赴くが、瀬戸内海で乗船していた船が機雷に接触し大破。九死に一生を得流のだが、21歳でハンセン病を発症し、長島愛生園で療養生活を送ることとなる。後、愛生園内での緞帳の制作現場で、絵画制作に関心を持つようになり、独学で研鑽を重ね、公募展などに出品。新世紀展などで活躍し、スペイン芸術勲章を受賞するなど、海外からも高く評価された洋画家である。「戦争と強制隔離」という近代の負の遺産を知る、清志初男のメッセージ性に溢れた絵画作品とその画業を鑑賞し、対話することは、この「コロナの時代」に、様々な社会課題の解決を目指し、新しい社会を模索する者たちにとって大切な作業といえるだろう。

本講座では以上の理由により、国吉康雄、清志初男の「反転学習用動画教材」の制作を行った。

3.2 反転学習用動画教材～「本を読むように絵画を読む・国吉康雄編」の参考資料と取材本シナリオの作成にあたり、以下を参照した。

- 小澤善雄著『飛翔と回帰』岡山文庫181
- ロイド・グッドリッチ『YASUO KUNIYOSHI』マクミラン社(1948)
- トム・ウルフ『The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi』展図録(2015)
- 筆者『国吉康雄を知っていますか』クニヨシパートナーズ(2016)

また、筆者が2015年に実施したバート大学のトム・ウルフ氏、国吉の生徒であったブルース・ドーフマン氏と、2018年より実施している、旧国吉康雄美術館キュレーターの小澤律子氏とニューヨーク市立大学の山村みどり氏への取材記録を反映させ、執筆した。なお、すべての取材者には、論文、その他の文章での発表の許諾を得ている。

3.3 反転学習用動画教材～「碧と祈る 清志初男の描く石仏」の参考資料と取材

本シナリオでは、本シナリオは2020年7月19日、長島愛生園の清志初男氏の自宅で行ったインタ

ビューと同年11月14日に行った北条五百羅漢保存会の衣笠武久氏への取材データ及び、十月以降、断続的に行ってきた国立療養所長島愛生園スタッフの方への、清志氏に関する聞き取りをもとに、次の資料を参照し、作成した。

長島愛生園「清志初男コレクション」
加西市郷土資料「加西市の歴史文化の成り立ち」
同「歴史文化ストーリーと関連文化財群」
羅漢寺パンフレット
羅漢寺境内碑文

3.4 完成作品の公開と利用について

映像作品「本を読むように絵画を読む・国吉康雄編」は以下のURLからの申請者にのみ、限定公開している。(才士)

¹ 2013年3月20日～6月9日の期間で実施。入場者は約2万人

² 才士真司「瀬戸内のアート運動と国吉康雄の結節点：国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座主

URL <https://yasuo-kuniyoshi-pj.com/inquiry.html>

映像作品「碧と祈る 清志初男の描く石仏」は、清志初男氏の画業を広く発信するため、長島愛生園歴史館、羅漢寺、加西市教育委員会の協力のもと、「国吉祭2020」の特別展覧会として、本講座が山陽新聞社さん太ギャラリーで開催した、『「碧」と祈る 洋画家・清志初男遺作展³』会場において上映した。同展は、清志初男氏の画業に関する証言を収集するため、来場者に、録音・録画を伴う取材活動を実施し、また、科学研究助成事業基盤研究(C:20K00232)採択研究課題「アートを介した社会課題の理解」のための対話探求鑑賞モデルの開発と実践研究に関する基礎調査も、感染対策を行った上で、実施した。

催『第3回企画展』実施のための考察」、岡山大学大学院教育学研究科研究収録(170), 15-39, 2019

³ 2020年11月22日～12月6日の期間で実施。入場者は約400人

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

ともに歌った仲間。清志さんはそうした話こそ、楽しそうに学生たちにしてくれた。そして、献身的に清志さんに寄り添った愛生園のスタッフたちへの感謝の気持ちも、繰り返し返す若者たちに伝えた。それでも、絵を描くことを知った清志さんが、『会いたい人がいるなら来なさい』と呼びかける羅漢を描くために海に漕ぎ出した姿を思うとき、衆生の病を癒す薬師如来のお堂で過ごした夜を思うとき、やはり胸に、熱いものがこみ上げる」

⑳ — アトリエの前の海

N「画家・清志初男の芸術は、出会った命に『祈り』を捧げるための芸術だ。今現在の時代と社会、人の心の在処(ありか)を問いかけてくる。コロナを経験した私たちが、育むべき価値とは何かを語りかけてくる」

作品《深閑》の青。

N「その青の深さに息を呑むとき、清志初男という画家の人生の深さも思う」

青の中から浮かび上がる仏たち。

クレジット

了

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

んの『無断外出』が、長島愛生園園長が検束権を持っていた頃の話だと言うことだ」

清志初男《長島の月夜》

N 「清志さんは、『外泊を咎められたことはない』と言っていた。また、園長はそれを『知っていたはずだ』とも言っていた」

⑮ — 清志さんの描く長島

N 「清志さんは、当時の園長が、清志さんの無断での外出、外泊を罰しなかった理由を、『絵を描きに行くのを知っていたからだろう』と言った」

⑯ — 羅漢の絵

N 「ある公募展で、清志さんは、描いた石仏を『岩のようだ』と評された」

清志さんの作品の絵肌。

N 「清志さんはその言葉に『自分はまだまだ』と思ったらしい。腹立たしさもあったと言った。だけれど、石仏は石だ。石の質感が良く出ていると言うのはいいことなのではないか。清志さんは、そう聞くと清志さんは、『僕は岩なんか描いていない』と声を大きくした。そう。清志さんは、仏を描いたのだから」

清志さんの描いた羅漢。

N 「清志さんはそのあと、独自の画風を極めていく」

清志さんの描く羅漢たち。

N 「それは、清志さんの記憶の形で、祈りの姿だった」

⑰ — 清志さんの航海帽

N 「戦時中、南方戦線に物資を運ぶ民間輸送船に乗っていた清志さんは、兵隊に抱きつかれ

6

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

たという。『連れて帰ってくれ』と、そう叫び、抱きつき、泣いた若い兵隊の顔が忘れられないと話してくれた」

清志さんの描く羅漢の顔

N 「清志さんの描く羅漢たちは、清志さんが出会った人々。先に旅立った画家仲間や、飲み屋で働く女性たち。そして愛生園での出会い。夜になると、そうした人たちの顔が浮かんできて、もう描かずにいられないんだと、清志さんは言っていた…どうしてか」

⑱ — 羅漢寺の景色

N 「羅漢寺にはこんな話が伝わっていた」

衣笠さんのインタビュー。

衣笠さん「親に会いたときや羅漢寺に來いという話」

字幕「親が見たけりや酒見北条の五百羅漢に御座れ」

N 「その姿、像かたち、顔立ち、持物(しもつ)の異なる石仏の面影には、親や友人など、縁ある人の顔が、そして自身に似た顔があると伝えられてきた」

⑲ — 羅漢の絵

N 「清志さんは、自分がハンセン病回復者であることと、その創作、作品を結び付けて語られることをとても嫌った。それを否定してもいた。愛生園に來たお陰で、絵を描くことを知り、画業に集中することができたとも言っている。人生に『もし』はないのだけれど、もし、清志さんが愛生園に入所しなかったらと考える。清志さんは絵を、石仏を描いていただろうかと。一方で、愛生園のある長島が、『近代・戦後復興・高度経済成長期』という時代の劇的な敵り(うねり)に、置き去りにされた人々を隔離した島だったことも忘れてはいけない。その人間性を無視し続けた『罪』を消すことはできない。清志さんの人生も、強制隔離政策によって、その選択肢を狭められたものだった。ただ、清志さんは描くことと出会った。そして、それを支える人々との出会いに支えられた。奥さん、絵の先生、酒を酌み交わし、

7

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

がよく行き届き、秋色に色付く木々と蟋蟀の鳴く声が、県内外から訪ねる人々を楽しませて
いる」

⑩ — 羅漢たち

羅漢像のザッピング。

N「そして、羅漢像。どこか他と趣を異にするその姿は、多くの物語を見る者に語り継がせてきた。播磨は赤松、別所、三好と歴戦の兵たちが駆けつけた古戦場に近い土地柄からか、戦から戻らなかった者たちの似姿が刻まれたのだとか。黒田領であった頃、『隠れキリシタン』の信仰の拠り所として作られたであるとか。そうした話が語り継がれてきたが、平成も終わりの頃になって、そもそも酒井寺に由緒のあるもので、羅漢が最初に作られたのは十六世紀末の慶長の頃ではないかとされるが、」

字幕「慶長五年が関ヶ原の戦い」

N「そうしたことがわかってきたのも平成も終わりの頃の話。羅漢像の謂れは少しづつ、紐解かれていくが、清志さんのことを知る先代の住職は既になく、しばらくの間、寺に住職が不在であったこともあって、清志さんの記憶を直接語る言葉には出会えなかった」

⑪ — 保存会 衣笠さんインタビュー

衣笠さん談笑の様子。

N「しかし、地元の羅漢像保存会の衣笠さんは、清志さんらしい画家のことは聞いていたという」

インタビューに答える衣笠さん。

衣笠さん「愛生園から人が来ていたという」

N「清志さんが羅漢や石仏を描き始めたころ、ハンセン病回復者に対する世間の視線はまだ冷たかった。治る病気であって、完治したとされてもなお、世間は臆病なままだった」

⑫ — 羅漢寺本堂

N「当時の寺の住職は、そんな清志さんが本堂に寝泊りすることを許してくれたらしい。そ

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

して本尊は薬師如来。薬師如来の本願は、衆生(しゅじょう)、つまりすべての生きとし生けるものの病を癒すことである。その願いが成就しない限り、『仏』とはならない。それが薬師如来である」

本堂のザッピング。

N「本堂には、大きな羅漢や不動さんの絵が納められていた。清志さんの他にも、この羅漢たちに惹かれた画家たちがいたことが。そして、清志さんも、ここで夢中になって羅漢を描いた」

⑬ — 羅漢寺

N「清志さんの描く羅漢は、多少、想像があるものだと思っていた。ところが、」

衣笠さん、展覧会のチラシを見る。

衣笠さん「清志さんの絵の印象」

清志さんの描く羅漢と羅漢像たちの比較。

N「かつて、世の平安を願い、信仰や供養のために造られた石仏たち。長い年月、雨風に晒され、その顔は崩れ、手は欠け、首が落ちたものもあった。それを、衣笠さんたち保存会の皆さんが、丁寧に治してきた。だから、清志さんが訪ねた頃、多くの羅漢たちに修復の手は付かずのほすであった。けれども、清志さんの描いた羅漢たちは、優しく、美しく、気高い。衣笠さんの、清志さんの描いた「仏」への印象を思うなら、清志さんの存在を伝える証人はまさに、この羅漢さまたちということになる。けれど、どうして清志さんは、羅漢を描こうと思ったのだろう」

⑭ — 愛生園の海

N「清志さんは、愛生園を船で抜け出し、加西に通ったと言っていた。姫路で『船で羅漢を見に来た』と道を探ねたら、ずいぶん驚かれたと自慢話のように笑っていた。船乗りで、船が沈んでも無事だった清志さんらしい逸話。…けれども、もっと不思議なのは、この清志さ

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

清志夫人作 短歌

ひたむきに
夫かりたつるは
なにならむ
描きし羅漢の
数知れずして

④ ー 愛生園 アトリエの前

清志のアトリエ。

N 「画家の名は清志初男、二〇二〇年八月十一日、世を去った」

アトリエ外観・その周囲の点景。

N 「清志さんの画業を語ることは難しい。その人生を語ることもまた、難しい。奄美に生まれ、よく笑い、よく呑み、童田姫の描かれたカステラが好きで、お洒落。毎日欠かさず歌い、輸送船に乗り戦争にも行った。社会的で気さくな人柄とその作品は大勢を魅了したが、描く姿を見た者は少ない」

⑤ ー 長島の景色

愛生園の棧橋。

N 「病のため、世間と切り離された瀬戸内の孤島での暮らしを支えたのは、妻と、キャンパスに込めた画業への創意工夫」

⑥ ー 清志さんの部屋

石仏を描きかけたキャンパスが置かれたイーゼル。

N 「画家は、弱る身体をベッドに横たえながらも、その傍に画具を置き、最期のときまで描いていた。そして、「白」で刻まれたサインを残す絶筆は、精緻な『石仏』となった」

作品(写真)《無題(石仏画)》

清志さんのサインにクローズアップ。

2

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

⑦ ー 秋の様子

落ち葉を踏みしだく音。車に乗り込み音がする。エンジン音がかかって、
× ×
東へと走る車の車窓。
N 「清志さんが逝き、季節が変わり、秋が深まった頃、清志さんが描き続けた仏の姿を探して、車を走らせた」

⑧ ー 加西市

車窓の景色

N 「兵庫県加西市北条、岡山から東へ2時間。かつて池田輝政(てるまさ)公も治めた古い町は、播州平野の中央に位置し、商人や文化人が集う街道の要所でもあった」

⑨ ー 羅漢寺・正面

N 「羅漢寺(らかんじ)と読む。かつては、東大寺造営に尽力した行基が開いた酒見寺(さかみじ)の伽藍のひとつであったが、明治の廃仏毀釈(はいぶつきやく)を受け、現在の地に薬師堂(やくしどう)が移築されたものである」

境内に入ってゆく。

N 「清志さんが描いた石仏・羅漢(らかん)はここにある。大正の頃、今は小学校となった竹藪の中に打ち捨てられ、朽ちるばかりだったその仏たちを、町内の人たちがこの寺に集めた。聞いた話だと、『仏をぞんざいしていると、町が廃れる』と、誰かが口にしたことがきっかけらしい」

大聖歡喜天前。

N 「この『聖天堂(しょうてんどう)』も町内から移築されたものだ」

進む視線。

N 「清志さんが初めて寺を訪ねた頃、境内にもススキが揺れていたと聞いたが、今は手入れ

3

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

で違う絵ですよ。ちよつと見ると、伝統的な西洋絵画のように見えますが、描かれたのは酔っ払いです。背景には立派そうな、格式の高そうな絵が、ちよつと見えていますが、この絵のメインは酔っ払いです」

犬飼恭平《酔った男(習作)》

伊藤「これは時代を現しているといえる絵です。さあ、どんな時代でしょうか。(展示室)そういう意味で言えば、国吉さんも含めて、この展示室にある絵はすべて、時代を描いたものです。時代が代わり、大きな戦争がいくつもあって、天然痘やスペイン風邪という途方もない感染症が世界的に流行し、大恐慌が起き、人種やジェンダー、信じている神様、信じた考え方、たくさんの方が殺されたり、耐えたり、戦った時代を知っている絵画です」

《ミスターエース》の前

伊藤「いかがでしたでしょうか。本を読むように、絵画を読む。そういう時間も大切だと、僕は、今だからこそ思っています。国吉さんたちが生きた時代と今のこの社会、どれだけ変わったのでしょうか。何が変わっていないのでしょうか。変えられずにいるのか、変えようとしてきたのか。変えてはいけないものだと、守ってきたのか。色々と考えるきっかけを、ミスターエースは、与えてくれます」

アニメーション『ミスターエース』の対話探究鑑賞におけるマトリクス

伊藤(声)「最後に一つ、絵については話らない国吉さんが、ミスターエースについて、少し、言葉を残しています。それは『色に命を』という言葉です。国吉さんの生徒は、『国吉の絵は、絵の内側から光る』と教えてくれたことがあります。だから国吉さんは、こんな美しい絵を、描くことができたんでしょうね」

9 岡山県立美術館展示室

伊藤「また、美術館は開きます。その時、実際に国吉さんの絵を確かめてみてください。絵の内側から何が輝くのか。そして、何を語りかけてくるのか。その声に、応えるために、知識を、情報を求めてください。そして、誰かと語り合ってみてください。そういう絵の楽しみ方もいいものです。それでは今日はこの辺で、また、お会いしましょう」

クレジット

了

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

清志初男 映像資料用シナリオ

碧と祈る 清志初男の描く石仏

作 才士真司

脚本・撮影・デザイン・編集 才士真司
ロケコーディネート 伊藤駿
撮影・録音・編集・仕上げ 佐々木 紳
出演 衣笠(保存会)
ナレーション 櫻井 杏子

① 一 黒

N(ナレーション)「その画家は、羅漢(らかん)を好んで描いた」

② 一 石仏画

作品《石仏画》のシリーズ。

N「怒り、泣き、笑う仏たちは、三種の白を混ぜ合わせた下地に重ねられた、緑、赤、そして青によって画面いっぱい溢れた。仏を彩る色の深みが、仏たちを躍動させた」

作品《崩落》のシリーズ。

N「ときに仏たちは形を無くし、土や岩くれと溶け合って、大地に還り」

作品《深閑》のシリーズ。

N「ときに、画家の心の奥の方、ずっとその深くに沈む記憶を映しとった『碧(あお)』へと変化した」

③ 一 奥さんの短歌

N「そんな仏たちを描く画家の様子を、画家の妻は『ひたむき』と詠んだ」

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

吉さんは戦時中に行った国際ラジオでの日本に向けたメッセージでアメリカを、『すべての人種が民主的な理想への信念を共有するがゆえに一つにまとまっている国』だと紹介しています。これがアメリカの理念で、独立戦争を行ってまで、勝ち取ったものです。国吉さんも、この精神を信じていました。それがアメリカで、民主主義の理念でした。ですが、そのアメリカにも二面性があったんです。戦争中、国吉さんがアメリカに協力した理由はいくつかわかりません。国吉さんには、たくさんの友達がいて、その友達や彼の生徒が、日本とアメリカが戦争を始めた時、国吉さんはアメリカの敵じゃないと署名活動をして、大統領に届けたりしています。またアメリカの移民に関する法律には、移民は、アメリカ国民のように努力しなければならぬと書かれていました」

《ミスターエース》

伊藤(声)「でも、アメリカでは、日本人の移民はアメリカ国民にはなれないと定められています。ミスターエースには、自分の素顔を隠す仮面も描かれています。でもなぜか、エースは、仮面を脱いで、素顔を見せています。仮面の道化師がわざわざ、その正体を人前に見せる様な絵というのは、あまり例がありません」

《ミスターエース》のキャプション。

伊藤(声)「ミスターエースが描かれたのは、一九五二年です」

伊藤「この年、国吉さんと同じ年に生まれ、国吉さんと同じ様にアメリカに移民としてやってきて、国吉さんと同じ様にアメリカを代表するアーティストだったチャールズ・チャップリン(アメリカの映画人・音楽家)が、アメリカから追放されたチャールズ・チャップリン『赤狩り』の標的となつたためです。そのチャップリンが、アメリカで最後に作った映画『タイムライト』も、一九五二年に作られています。そして、この映画の主人公も、道化師です。こういう場面があります。年老いた道化師を演じるチャップリンは、映画の中で、初めて、道化のマークを落とすんです。チャップリンについては、みなさん、調べてみてください」

《ミスターエース》の表情

伊藤「《ミスターエース》について、もう一つ、面白い指摘があります」

《ミスターエース》全身

伊藤(声)「エースの姿、手つきというのが、仏教の守護神である仁王様に似ているというも

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

のです。しかも、口元を引き締める姿は、物事の終わりを表す『卍形』ではないかと。確かに、言われてみればですし、昔、後樂園には仁王像がありました。でも、思い出してください。エースには、**始まりの数字**、1だという意味もあるとお話しました。つまり、ここには始まりと終わりがあり、二つの意味があり、隠していた自分を人前に晒し、そして切り札である」と

展示室

伊藤「いかがでしょうか。みなさんは《ミスターエース》という絵から、どんな物語を紡ぐことができそうですか。それで、僕もここで、正解は、と言いたところなんです。実は、国吉さんが、どういう意味を込めて、この絵を描いたのか分かりません」

国吉の三枚の絵

伊藤(声)「国吉さんの絵について、いろんな人が、いろんなことを言っていたり、書いていたりしますが、本当のところは分からないんです。国吉さんという人は、自分が描いた絵について、説明をしませんでした。でも、今お話してきた様に、この作品や隣の絵のように、国吉さんの作品には、たくさんの歴史的な情報や、メッセージが隠されています。絵と向き合って、たくさん話しかけてみてください。そして、国吉さんの人生を、生きた時代を調べてみてください。そうすれば、絵はあなたに、大切な言葉を語りかけてくるかもしれません。あなたがその物語を紡げるかもしれません。その物語こそが大事だと、国吉さんは言っているんじゃないかと思えます」

展示室。

伊藤「でも、そういう体験ができるのは国吉さんの絵だけではありません。例えば、この同じ展示室の中に、国吉と同じ年に、国吉の家のすぐ近くで生まれ、フランスでキュビズムに出会ってしまった坂田一男という人がいます」

伊藤、坂田《キュビズム的人物像》の前に。

伊藤(声)「これが坂田さんの作品です。どうでしょう。この作品は、一九二五年にパリで描かれました。この年、坂田さんは、あの、ピカソとの展覧会の準備に追われていたと日記に書いています。どうです。なかなかなかなかかかでしょう。(犬飼に)それから、その隣には、**犬飼恭平**という人の絵があります。この人は倉敷の人で、やはりアメリカに渡るのですが、国吉さんとは同じ展覧会に出品をしていたりします。でも、国吉さんとも坂田さんともまる

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

1955年 59歳ルック誌が選ぶ「現代アメリカの最も優れた画家の10人」に選出される。ホイットニー美術館で、同館初の存命画家の回顧展が行われる。
1956年 60歳 小論文『美術における普遍性』を発表。ナショナル・インスティテューティート・オブ・アーツ・アンド・レタースの名誉会員。
1957年 63歳 第26回ヴェネツィア・ビエンナーレに、4人のアメリカ代表作家のひとりとして参加。

8 一 泉美・エース前

伊藤「その理由は国吉さんの選択にあります。例えば、国吉さんが、日本とアメリカの戦争が始まって、日本に戻らなかったということか」

伊藤、歩き出す。

《夜明けが来る》の前。

伊藤「この絵は太平洋戦争の最中、ニューヨークで描かれました。タイトルは《夜明けが来る》。みなさんは夜明けに、どんなイメージを持つでしょうか。みなさんは、夜明けを待つ、彼女の気持ちを、どんな風に想像するでしょうか」

《夜明けが来る》

伊藤（声）「アメリカの日系新聞は、国吉さんのことを『民主主義の擁護者 日系新聞『パシフィック・シチズン』は、1952年5月12日付の紙面で『熱烈な民主主義の擁護者』と、国吉を紹介』と書きましたし、アメリカから日本に向けてのラジオ放送では、日本の軍国主義を批判する演説をしました」

カメラ、伊藤になって、伊藤、歩き出す。

伊藤「でもですね、当たり前ですけど、戦争中、国吉さんはアメリカにとって**敵国人 敵性外国人として監視対象になる**でした。政府の組織に監視されたり、財産を没収されています。それでも、国吉さんは、アメリカ政府に協力します。そんな国吉さんの戦後はどうだったんでしょうか。それを表しているのがこの絵です」

《このぼり》

伊藤（声）「鮮やかな色彩は、『ミスターエース』に似ていますが、もっと分かりやすいメッセージと、それに気づいて欲しいというヒントが、この絵の中には隠されています。大きな

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

赤い鯉のぼりを掲げて行進するサーカスの一座が描かれていますが、どうして、サーカスのパレードが、日本の鯉のぼりを使うのでしょうか。この絵は日本を描いているのでしょうか。しかも、赤い鯉です。先ほど、昭和六年から七年にかけて一度、国吉さんが岡山に帰ってきていたことをお話ししました。その時、国吉さんは、この赤い鯉のぼりをお土産として買って帰り、自宅の庭に上げていました」

写真《国吉康雄がアメリカに持ち帰った岡山土産の「こいのぼり（和紙）」と油彩画「こいのぼり」岡山大学国吉康雄研究講座企画展覧会「ミスターエース オーバーモダン展」会場写真・撮影 伊藤 駿

伊藤（声）「それに国吉さんは、江戸時代の浮世絵師、**歌川国芳**とよく間違われたりしていました」

歌川国芳の《自画像》『枕辺深閑梅』下巻口絵より（一妙開程芳名義）

伊藤（声）「その歌川国芳が描いた赤い大きな鯉の絵を、ポストン美術館が展示していたりしました」

歌川国芳《鬼若丸の鯉退治》弘化2年（1825年）頃 大判三枚続

伊藤「そして、この絵が描かれた頃、アメリカには『赤狩り』という、共産主義者を弾圧する運動が起こっていました。国吉は、共産党員ではありませんでしたが、アメリカのアーティストたちの権利運動のリーダーだったため、国務省のブラックリストに載っていたと、彼の生徒が証言しています。いったい国吉は、このこいのぼりにどんな意味を込めたのでしょうか。それに、目を引くのが大きく書かれた**JULY 4**、七月四日。この日は、アメリカ合衆国にとって、もともと特別な日、『**独立記念日**』です」

テロップ「1776年7月4日 合衆国独立宣言(前文)」

人間の命と自由と
幸福の追求は
根源的な権利であり
人々が意思をまとめ
国の政治社会を革新する権利は
侵すことのできない権利である」

伊藤「そう、この絵に描かれているのは、アメリカで、独立記念日のパレードなんです。国

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

伊藤(声)「まず、このタイトルについて考えてみましょう」

スミソニアン図録を手にした伊藤。

伊藤「この本は、二〇一五年、アメリカの国立美術館であるスミソニアン・アメリカン・アート・ミュージアムで開かれた、国吉さんの特別展覧会のために作られた本です。(ミスター・エースのページを捲る)この展覧会を考えた、アメリカ、バート大学のトム・ウルフ先生は、『エースは切り札』という意味と、表と裏という二つの顔、二面性という意味もあるスラングだ』と言っています」

図録のエースのアップ。伊藤、図録を静かに閉じる。

イメージ・シンボル辞典を手を取っている伊藤。

伊藤「これは『イメージ・シンボル辞典』です。この辞典にもエースというのは、トランプでは最初の数字である1を表していて、**最善、最高の意味**だけど、サイコロの場合だと**最低、悪運**を意味するとあります。ほらここ**辞典の文字**」

エースの表情。

伊藤(声)「この、悲しそうにも、どこか冷たい印象も受ける目は、何を見ているのでしょうか。この表情にも、そういった二面性があるんでしょうか」

伊藤、辞典をくっけている。

伊藤「もう一度、『イメージ・シンボル辞典』を引いてみます」

辞典、『Lester』のページ。

伊藤(声)「Lester。道化師について調べています。そう。この《ミスターエース》は道化師、ピエロを描いたものです。それで、道化の意味は…その衣装が」

ミスターエースの衣装

伊藤(声)「マダラで二面性を表すと書かれています。道化師にも、そもそも二面性という意味があったんですね。(エースのフル)道化を表す英語には他に、**フル**や**クラウン**といったものがあります。そこには、**王様、キングをひっくり返す役割**を受け持ちながら、王が犠牲

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

にならなければならないような時、その**身代わり**になるとも書かれています」

エースと伊藤

伊藤「道化師そのものに、二つの役割があるんですね。王様というのは権威や力の象徴です。その王が犠牲になるとき、つまり、死ななきゃいけない時に、道化が身代わりになるとはとういうことでしょうか？ 普段は王を茶化すのが道化なのに。このあたりのことは、中性ヨーロッパの歴史や文学を勉強してみると、とても面白くなりますよ。絵は、こんな風に、題材に描いたものが持つ意味を利用して、メッセージを絵の中に隠すことができます。皆さんも好きな絵で、調べてみてください。倉敷の**大原美術館**には、そんな絵がたくさんあります。本物を見るための準備を、今、やっておくのもいいかもしれません。では、国吉さんに話を戻して、その人生の、華やかな経歴を見てみましょう」

8 国吉の後半生の年表・Resume

伊藤(声)「1920年代以降、国吉さんは、たくさん挑戦を繰り返して、その作品の感じ、画風を変えてきました。そして、アメリカの美術界で高い評価を受けるようになりました。ですが、第二次世界大戦の勃発を機に、社会に対する活動を行うことや、アメリカに暮らす日系人や移民の気持ちを代弁する言葉や行動が期待されるようになります」

1929年 40歳 ニューヨーク近代美術館(MOMA)の19人のアメリカ作家展・に選ばれる。

1932年 43歳 サロンズ・オブ・アメリカの会長に就任。

1933年 44歳 アート・スチューデントズ・リーグの教授に就任。

1936年 47歳 アメリカ美術家会議第一回総会に参加。展覧会委員長に任命される。

1938年 49歳 アメリカ美術家会議副委員長に選出。

1939年 50歳 美術家団体、アン・アメリカングループ設立。会長に就任。

1940年 51歳 MOMAでの討論集会、「アメリカ美術は外国の美術の動向に脅かされているか？」にパネリストとして参加。

1941年 52歳 日米開戦により、「外国人居住者」から「敵性外国人」の身分となる。アメリカン・グループ、アート・スチューデント・リーグの学生が国吉支持を発表。在ニューヨーク市日本人美術家委員会を結成し、アメリカ合衆国に忠誠を誓う。

1944年 55歳 「民主主義のための日系人芸術協議会」の会長に選出。日本帝国主義を弾劾する声明を発表する。

1947年 58歳 美術家組合、アーティスト・エクイティ・アソシエーションの初代会長に就任。

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

大日本帝国憲法、皇室典範、衆議院議員選挙法公布。
東京美術学校開校。

世界

ベンジャミン・ハリソン、第22代大統領に就任。
ウォールストリート・ジャーナル創刊
エッフェル塔落成・パリ万博開催。

伊藤「この年、日本中がお祭り騒ぎだったわけですが、世界的に見ても、近代を語る上でとても大切な年です。ちよつと一八八九年という年を、みなさん調べてみてください。それでその画家ですが、名前を**国吉康雄**といいます」

テロップ「1889年～明治22年 国吉康雄 誕生する

国吉康雄、岡山県岡山市中出石町（現出石町）に、人力車夫の父、宇吉と、母、以登の間にひとりっことして生まる。

国吉康雄の肖像写真（撮影 ソウイチ・スナミ）
出石町のシャッターアート前に伊藤。国吉の肖像部分の前に移動。

伊藤「この人です。国吉さんは日露戦争が終わった翌年、この町を離れ、アメリカに労働移民として渡りますが、その時、一六歳。高校を中退してまでの決断でした」

アニメーション「渡米地図」

5—アニメーション・Keypnote

伊藤（声）「国吉さんの決断の背景に、何があったのかは、本当のところは分かりません。ただ、国吉さんには、兵隊になるか、アメリカに行くか。一六歳の国吉さんには、その二つの選択肢しかなかったようです。国吉さんは、アメリカに渡ったあと、ヨーロッパやメキシコにも行きますが、その生涯のほとんどをアメリカで過ごしました」

6—出石町・シャッターアート前

伊藤「国吉さんは若い頃、鉄道の車庫の掃除をしたりホテルで働いたり、農場で働いていたりしたようですが、それでも、**夜間高校**には仕事の合間に通っていたようです。そして、そこで描いた絵を先生に褒められます。国吉さんは岡上で**西陣織のデザインを学べる高校**（工業高校の解説）に通っていました。その経験が生きたんですね。それで、アメリカでも絵を教えてくれる学校に通って、働きながら、勉強を必死にやっただけです。当時のアメリカには、

3

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

才能を伸ばそうという人を応援する社会のシステムが、既にありました。やる気と勇気はいりますが、国吉さんは、それをやり遂げました。国吉さんはなんと、**ベネチア・ビエンナーレ**という、芸術の世界でのオリンピックと呼ばれるイベントに、アメリカ代表として参加したほどこです」

シャッターアート。

伊藤（声）「ちなみに、このシャッターに描かれた絵は、昭和7年の正月の様子を」

写真《昭和7年 正月 後楽園の国吉康雄》撮影者不明・岡山県立美術館蔵

広島市立大学の画学生さんが想像して描いてくれたものです。国吉さんは、この前の年に、生涯でたった一度となる日本への帰国を果たし、故郷である出石町でお父さんや幼なじみと過ごしています」

7—県美・展示室

ミスターエースと伊藤。

伊藤「さあ、絵の前に戻ってきました。明治の日本で育った少年が、どんな教育を受けたら、こんな絵を描くようになったんでしょうか」

《ミスターエース》に寄っていくカメラ。

伊藤（声）「一番上の色の下に、違う色が透けています。それも、何色も見えます。ただの赤、ただの緑、ただ白を塗ったわけじゃないんですね。でも、多くの油絵に見られるように画面が盛り上がりつつあるということはありませぬ」

《ミスターエース》と伊藤。

伊藤「とても綺麗な色です。皆さんにも、本物を見て欲しいです。この色、塗り方は、国吉さんのオリジナルで、なかなか真似ができませんでした。ここで絵のタイトルを見てみましょう（キャプションの前進み、指差す）《ミスターエース》とあります。彼の名前でしようか」

エースの表情。

4

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

国吉康雄 映像資料用シナリオ

本を読むように絵画を読む・国吉康雄編

作 才士真司

脚本・撮影・デザイン・編集 才士真司
写真撮影・出演 伊藤駿
編集・仕上げ 佐々木紳

太字 テロップ入れ・補足説明

① 岡山県立美術館(県美)・エントランス

県美エントランスに伊藤
伊藤紹介テロップ／国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座 助教

伊藤「みなさん、こんにちは。本を読むように絵画を読む。今日は岡山県立美術館にお邪魔します」

伊藤、県美に向かう。

タイトル／本を読むように絵画を読む

② 一 県美・中・階段

伊藤、2階展示室への階段を上がる。

伊藤「岡山県立美術館には、岡山ゆかりのアーティストの作品がたくさんあります。今日、皆さんと一緒に見てみたいと思っている作品も、岡山と関係のある画家の作品ですけど、さて、どんな関係があるのでしょうか。そして、どんな絵なのでしょうか」

伊藤、展示室へ。

③ 一 展示室・中

伊藤「これが、その作品です」

ミスターエース・フルショット／エース寄り

1

国立大学法人岡山大学大学院教育学研究科《国吉康雄記念・美術教育研究と地域創生講座》

伊藤「…いかがですか。もっとじっくり見てみましょうか」

ミスターエースの抜きショット(顔、仮面、足元、背景、また全体)

伊藤(声)この絵、じつと見ていると、何か気になりますか。それに、何がどうなっている絵になったのでしょうか。…みなさん、どう思われますか。タイトルとか作者とか、気になりますか?でも、そういう情報に頼る前に、まず先に絵に質問をするぐらいの気持ちで、絵を見てみましょう。例えばこの表情。どう思われますか?」

字幕「怒っている?笑っている?それとも泣いている?何か考えている?何を考えている?」

《ミスターエース》と伊藤。

伊藤「どうでしょう。表情以外にも、いろいろと、気になるところがあったと思います。僕はこの目が絵に近づく、他人に思えないんですけどね」

エースの表情。

伊藤「さて、少しお話をしましょう。(歩き出す)この絵を描いた画家は、ここ、岡山県立美術館のご近所で生まれて、育ちました。皆さん、今も昔も日本を代表する名庭園、後楽園。ご存知ですか」

後楽園の写真(「五十三次腰掛茶屋より唯心山を臨む」撮影・榎野博史)

4 一 出石町・鶴見橋

鶴見橋の伊藤。歩き出す。

字幕／岡山市北区出石

伊藤「この橋の向こうが後楽園です。とても素敵な場所ですよ。そして、ここ出石町のこの路地の奥で、今日の主役の画家は、一八八九年、明治二年に生まれました。この年はフランス革命から百年を記念して、パリにエッフェル塔が建てられた年です。日本では大日本帝国憲法が成立しました」

写真《エッフェル塔》撮影者不明

錦絵《憲法発布略図》 明治十二年 楊洲周延 画

出来事 日本

2